

# 中村町遺跡6

—中村町遺跡第7次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1365集

2019

福岡市教育委員会

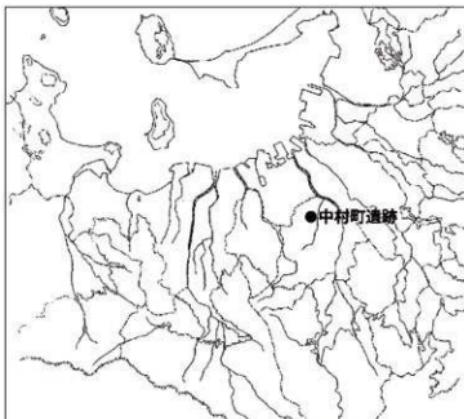


NAKA MURA MACHI

# 中村町遺跡6

—中村町遺跡第7次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1365集



調査番号 1706  
遺跡略号 NMM-7

2019

福岡市教育委員会



## 序

福岡市には北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶間なく続けてきた歴史があります。この地の利を活かした人々の生活を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれて明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上においても重要視されているところです。

本調査では今から約4、5千年前と考えられている縄文時代前期の土器がまとまって出土しました。市内では特に数少ない貴重な資料でもあり、当時の生活や環境などを調べる上で重要な情報を得ることができました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく多様な開発で消滅する埋蔵文化財を将来に残していく記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで福岡財務支局をはじめ関係者の皆様のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成31年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

## 例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成29年度に特別養護老人ホーム建設に伴い、福岡市南区野間3丁目160番1地内で実施した中村町遺跡第7次調査報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は地権者の福岡財務支局と協定書を締結し、公共受託事業として実施した。
3. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構実測図は荒牧の他、藤野が作成した。
4. 本書に掲載した遺構、遺物写真は荒牧が撮影した。
5. 本書に掲載した遺物実測図は、荒牧、平川敬治、淨善は荒牧が行った。
6. 本文は荒牧が執筆した。
7. 本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた総ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、活用されていく予定である。

## 凡 例

1. 本書に用いた方位・座標は世界測地系による。
2. 掲載した遺物の番号は通し番号とした。
3. 遺構の種類を示す略号として据立柱建物跡をSB、竪穴住居跡をSC、土壙をSK、溝をSD、柱穴をSP、性格不明のものをSXとした。

## 本文目次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
II	位置と環境	1
1.	地形	1
2.	既往の調査成果	1
3.	福岡市内の曾畠系土器出土遺跡	2
III	調査の記録	2
1.	調査の概要	2
2.	調査区の設定	5
3.	基本層序	5
4.	検出遺構	5
	(第1面) SD01、02、28、SX04、SX45	
	(第2面) SD43、SX44、SX44出土縄文土器、SX44出土石器	
	その他の遺物	
IV	おわりに	14
1.	遺構の時期と性格	14
2.	SX44出土土器について	14

## I はじめに

### 1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会は同市南区野間3丁目160番1地内における埋蔵文化財の有無についての照会を地権者である福岡財務支局から提出され平成28年8月2日付で受理した。これを受けて文化財部埋蔵文化財課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である中村町遺跡に位置していることから試掘調査を翌年1月24日と2月7日に実施し、遺構を確認した。統いて特別養護老人ホーム建築計画が決まり、事業者である社会福祉法人来福から埋蔵文化財の有無についての照会が平成29年3月10日付けで提出された。試掘調査では客土を取り除いた下層から2面の遺構面が検出された。南側に隣接する5次調査成果から下面は縄文前期の曾畠式土器がまとまって出土すると予想された。この試掘結果に基づき遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから建物部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意し、福岡財務支局を委託者、福岡市長（福岡市経済観光文化局）を受託者として埋蔵文化財に関する基本協定を平成29年5月12日締結した。統いてこの協定書に従い発掘調査を同年5月25日から7月14日まで実施し、平成30年度に資料整理および報告書作成を行うことになった。

### 2. 調査の組織

平成29年度の発掘調査、および30年度の資料整理、報告を以下の組織体制で行った。

【調査主体】 福岡市教育委員会

【調査総括】 経済観光文化局 文化財部埋蔵文化財課 課長 常松幹雄（29年度）

文化財活用部埋蔵文化財課 課長 大庭康時（30年度）

調査第2係長 大塚紀宣（29・30年度）

【庶務】 文化財保護課管理調整係 松原加奈枝（29年度）

文化財活用課管理調整係 松尾智仁（30年度）

【事前審査】 埋蔵文化財課事前審査係長 本田浩二郎（29・30年度）

主任文化財主事 池田祐司（29年度）

田上勇一郎（30年度）

文化財主事 吉田大輔（29年度）

中尾祐太（30年度）

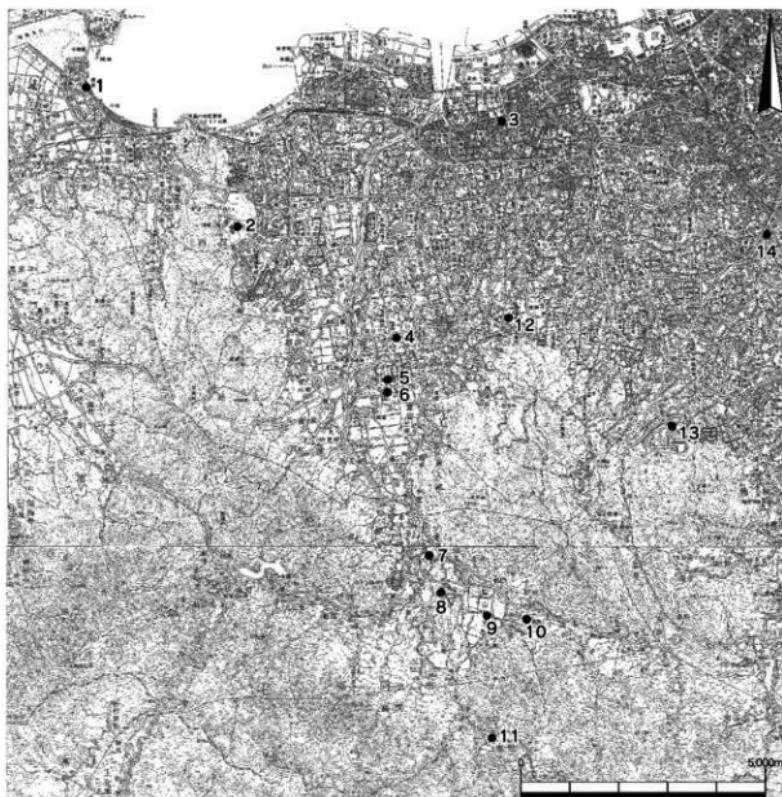
## II 位置と環境

### 1. 地形

中村町遺跡は現在では地形が不明瞭となっているが、Fig. 3の昭和初期の地形図にみられるように北側に派生した丘陵に立地し、本報告の7次調査地点はその先端に位置している。東側には現在、若久川が流れているが、丘陵間を流れる若久川の下部には埋没谷が形成されていると考えられる。

### 2. 既往の調査成果

隣接地の3次、5次調査によって、第1面の明黄褐色粘質土が開析を受け、南側に抉られていることが予想された。本調査において南東部の一部のみに明黄褐色粘質土が検出されることから、遺跡範囲のラインより南側に緩やかなカーブで侵食されているラインが考えられる。この侵食した流路の堆積層から縄文前期後半の曾畠式土器がまとまって出土した。



1. 今山遺跡 2. 広石古墳群 3. 西新町遺跡 4. 田村遺跡 5. 四箇古川遺跡 6. 四箇遺跡 7. 大坪南遺跡 8. 中山遺跡  
9. 騎山A遺跡 10. 栗尾B遺跡 11. 桜葉A遺跡 12. 梅林遺跡 13. 柏原A遺跡 14. 中村町遺跡

Fig. 1 福岡市内の縄文前期土器出土地点 (1/100,000)

### 3. 福岡市内の曾畠系土器出土遺跡

福岡市内で曾畠系土器が出土した遺跡はFig. 1で示したように11か所である。このうち今山遺跡(1)と西新町遺跡(3)は海岸地点である。早良平野の奥に位置した内野、騎山地区の扇状地頂部や丘陵部に多いが、圃場整備や区画整理に伴った調査によるものである。

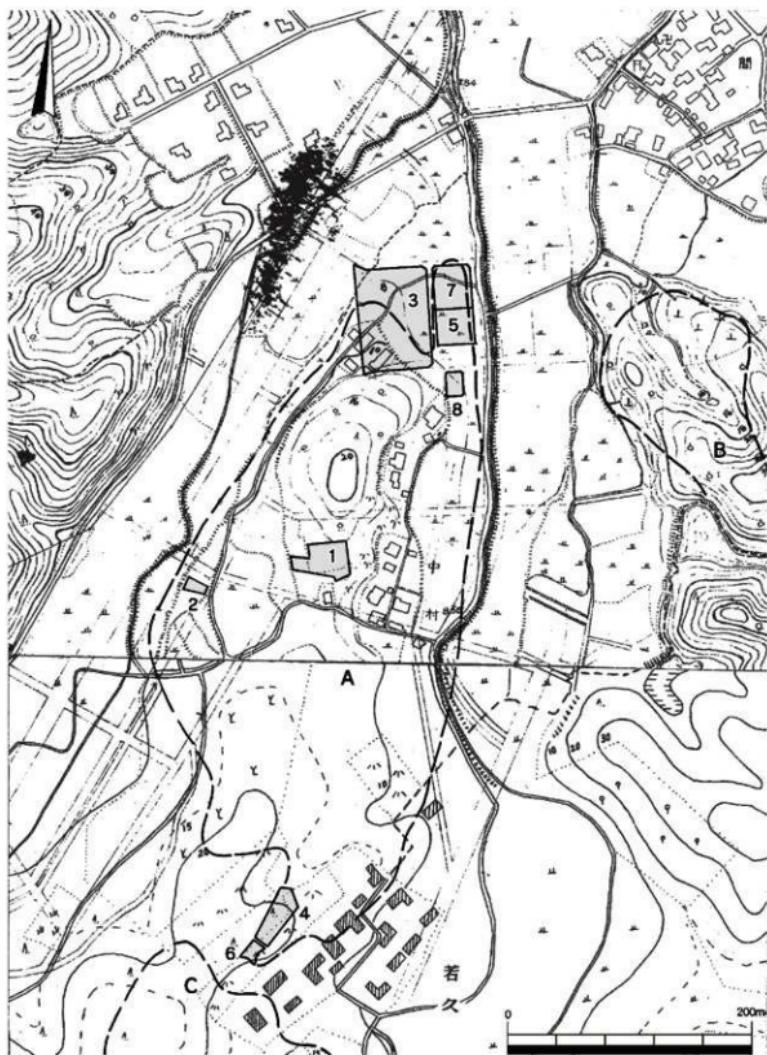
## III 調査の記録

### 1. 調査の概要

南側隣接地の5次調査の延長が検出された。5次調査同様に2面の遺構検出面が確認されたが、既存建物による破壊が著しく、上面の第1面は南端にわずかに残る程度である。その部分からは5次調



Fig. 2 中村町遺跡の既往調査地点 (1/4,000)



A. 中村町遺跡 B. 野間A遺跡 C. 若久A遺跡 ※数字は調査次数

Fig. 3 中村町遺跡の旧地形図（昭和初期、1/4,000）

査の溝の延長SD02が検出された。下面の第2面は丘陵周縁を開析しながら埋没していった流路の堆積土である。そこから5次調査同様に一部集中して縄文前期後半の曾畠系土器が多く出土した。

## 2. 調査区の設定 (Fig. 5)

計画された建物の基礎と掘削はほぼ全域に及ぶために調査対象地は敷地全体であった。しかし、試掘等により北側は既存建物による破壊が著しいと考えられることから建物が無かった中央部と5次調査に繋がっていく南側に調査区を設定し、その状況によって北側へ拡張していく予定にした。

作業スペースや廃土置き場を確保する必要からFig. 5に示したようにI区～4区を順次、反転しながら調査を進めた。

## 3. 基本層序 (Fig. 6 Ph. 5, 6, 10, 11)

1項で既述したように検出された2面の遺構面のうち第1面（上面）の明黄褐色粘質土は南東隅の一部のみに残存する程度である。第2面（下面）は2区南東隅以外の流路が埋没した範囲で検出を行った。2、3区南壁面の土層図Fig. 6C-C'では第1面に相応する4～6層を下げた8層以下の層位が第2面となる。この8層からはFig. 15-80の白磁皿が出土したことから中世以降の堆積層となる。従って、繰り返し流水に洗い流された堆積物が中世以降になってその上部に緩やかに堆積したものと考えられる。

基本層序はFig. 6A-A'に示したように5、60cmの客土下に水田土壤、床土が堆積し、その下部にマンガンを多く含む灰褐色粘質土（4層）、第1面の明黄褐色粘質土（5層）となる。上記のように南東部以外は流路の堆積層が広がり、第1面に比定できる土層は変化が著しい。Fig. 6の2区北東隅B-B' 6層の褐色砂質土、1区トレントのD-D' 1層明灰色シルト、2層灰色粗砂層が相当する。これらの層位から平面で不整形なプランとなった部分が検出されるが、遺構とは認めがたく流水による堆積物の変化とみられる。1区SX01土層のE-E'で観察されたように流水による砂～砂質土の堆積土である。この第1面を掘り下げた層中からは弥生から中世までの遺物を含むが、コンテナ1箱分の少量である。

## 4. 検出遺構

### （第1面）

明黄褐色粘土が堆積する2区南東隅でSD01、02、28等が検出された。  
SD01, 02, 28 (Fig. 5 Ph. 4, 5)

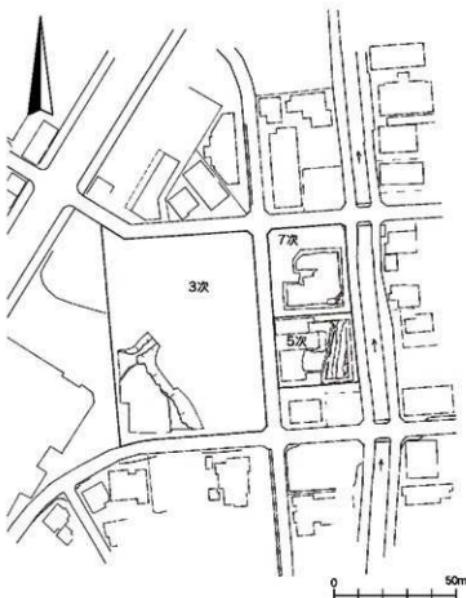


Fig. 4 中村町遺跡第7次調査地点 (1/2,000)

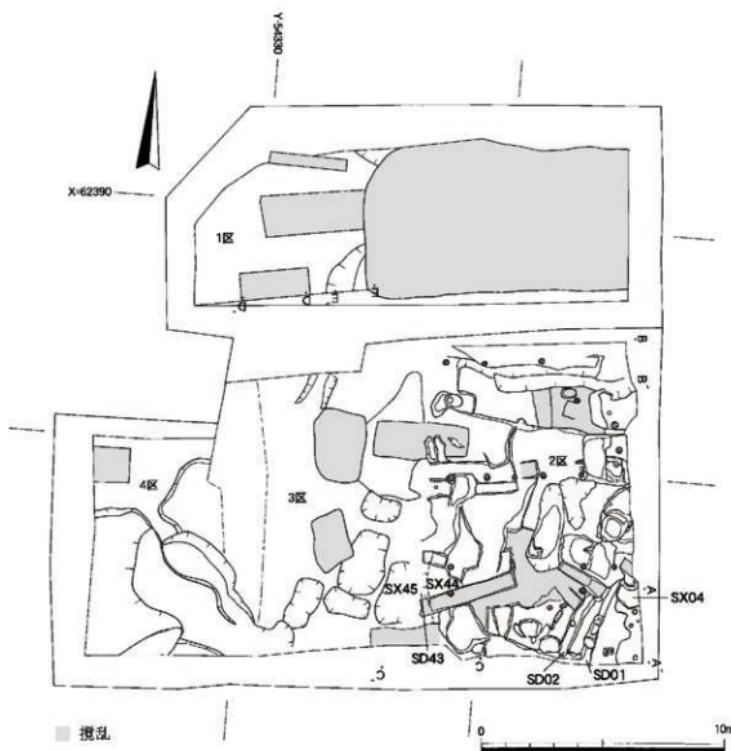


Fig. 5 遺構全体図 (1/200)

5次調査のSD1002、1003の延長と考えられる。3構は平行して直線的にN-23°-Eの北北東方向に走行する。北側延長は流失しているため不明である。SD02からは図示 (Fig. 15-74~78) した弥生終末の土器片を多く含むが、5次調査では8世紀代以降の古代に比定されている。

#### SX04

2区の南東隅で検出された土壙である。径120cm程の円形に近いプランを呈し深さ約20cmを測る。出土遺物Fig. 15-81は炉壁、若しくは取鍋の可能性がある。外面は淡い赤褐色を呈し、指頭痕が残る。内面は還元した淡青灰色を発し、胎土が発砲している。図示した左側縁は口縁の可能性がある。

#### SX45

3区で検出された不整形の落ち込みである。出土したFig. 15-79の瓦玉から中世以降と考えられる。

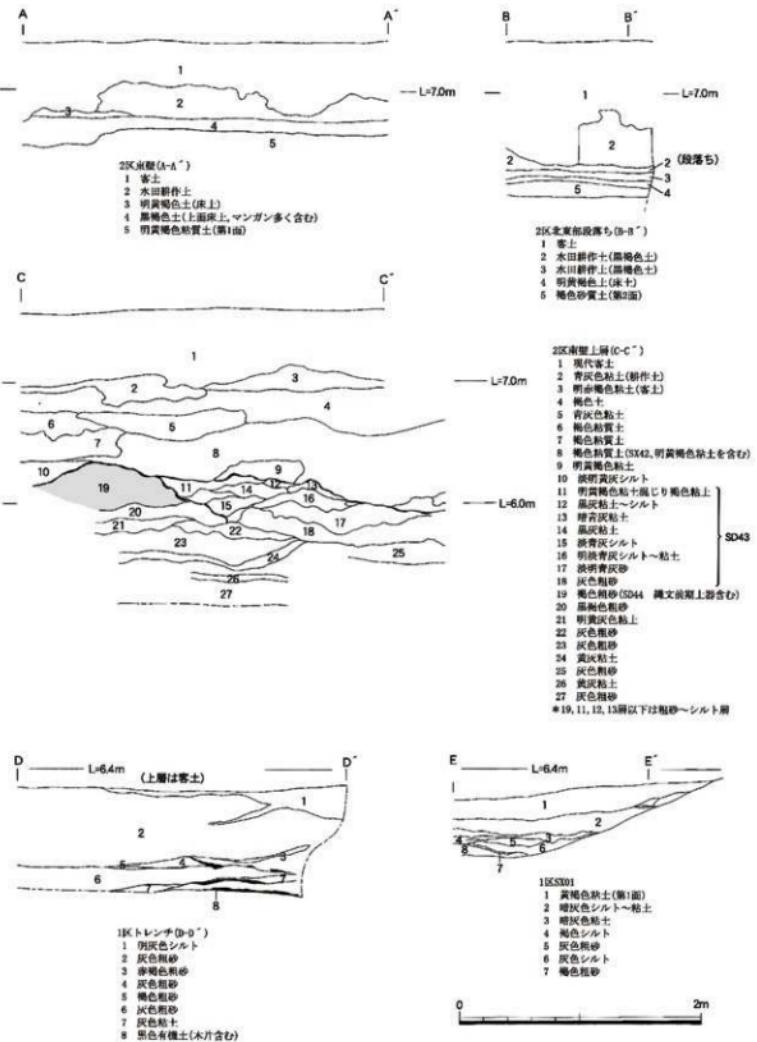


Fig. 6 遺構面, SD44 (縄文土器出土地点) 土層図 (1/40)

## (第2面)

調査区の大半を占める流路内で検出されたSD43の流路とその岸際に堆積した縄文前期の曾畠系土器を含むSX44を調査対象とした。

### SD43、SX44 (Fig. 5, 6C-C' Ph. 9~12)

2区と3区の境付近で検出された。Fig. 6C-C' に図示したように客土、耕作土以下に褐色粘質土が堆積し、その下層から砂層となる。3項基本層序で既述したように上層の褐色粘質土(8)は出土遺物から中世以降の堆積層である。その下層砂層から流路のSD43、流路内堆積層SX44が検出された。標高は6.3m以下である。検出されたSD43は南北に延長していくことが確認された。第5次調査の流路1122の延長になる可能性が高く、埋土の砂層中からは遺物をほとんど出土しない。

SX44はC-C' 19層の灰褐色粗砂層である。SD43に切られた右岸の堆積土であるが、粒子が粗く、強い水流によって運搬された堆積土と考えられる。SD43下底との間には有機質の薄い層が堆積するが、その肩の最上層に縄文前期の轟系、曾畠系の土器が集中して出土する地点を検出した。この層位と地点をSX44として名称を付け、遺物を取り上げた。土器は南側の一部に集中し、北側では検出されなかつた。従つて、土器の分布は5次調査地点の南側の方に密度濃くなっていくことが予想される。しかし、最近、調査を実施した南側の8次調査地点では縄文土器が出土しなかつたことから、南西側の丘陵尾根線に近い方に分布の中心があるものと考えられる。

### SX44出土 縄文土器 (Fig. 7~12 Ph. 13~15)

Fig. 7の1~9はコーリングをほとんど受けず遺存状態が良好である。暗褐色ないし黒褐色を呈し脆く、薄い器厚である。内面は4が丁寧なナデにより条痕を消されているが、他の口縁から体部上位にかけては横位の条痕が明瞭に残る。1~3は菜畠遺跡(註1)の1号土壤墓出土に近似し、曾畠III式(註2)に比定される。

1は突起状の頂点を有した波状口縁で、端部は細めて丸く收める。口縁に沿つて2列の押引文が巡る。同様の押引文を口縁から約6cm下に横位に巡らして文様帶を作り、さらに突起状の口縁頂部から矢羽状の短線で分割し、矢羽の沈線を充填している。下位の押引文より以下では浅く縦位の条痕が残る。2の隆帯は頂部に沈線を施し、両脇に横位から斜位の短い沈線を刻む。3は1と同様の文様構成であるが、分割する縦位に配した矢羽の短線が近接し、間に斜位の沈線のみで充填している。4は口縁部にかけて内湾し、細くなった口縁端部に刻みを入れる。外面は縦位の沈線列で限った文様帶に上部は口縁の波状に沿つた斜位の沈線、下部は横位の沈線を施す。内面はナデ調整で条痕はみられない。5、6は押し引き状に縦位2列に配した短線で限った下部に2本単位の縦位の沈線を施す。7は1、3と同様の文様である。8は4の文様構成に近いが、口縁の波状が緩やかで、縦位の沈線で区画された文様帶には横位の沈線と縦位の押し引き状の列点で充填されている。9は体部上位から口縁にかけて内湾し、口縁端部は細く丸め刻みを施す。外面の口縁部付近に横位に4列の短い沈線を施し、その下位は長く、縦位の沈線を刻む。

Fig. 8の10~27は矢羽文、組帶文などの組み合わせた沈線文を施した破片である。10~13は滑石を含み、硬質な焼成である。10は上方斜めから穿った径3mm程度の孔を有す。これらは出土した曾畠系土器中では古いタイプである。

14~27は滑石を含まず、焼成は脆い。沈線は細くなり、浅く不明瞭となっている破片が多い。文様は21、23、24、25のように粗略化しているものもある。内面には条痕をほとんど残していない。沈線が太い18、26、27の口縁部内面には沈線文が施されている。

Fig. 9の28~31は弧線を施す。32~36は横位の平行線が施され、33~36は細く、37、38は緩や

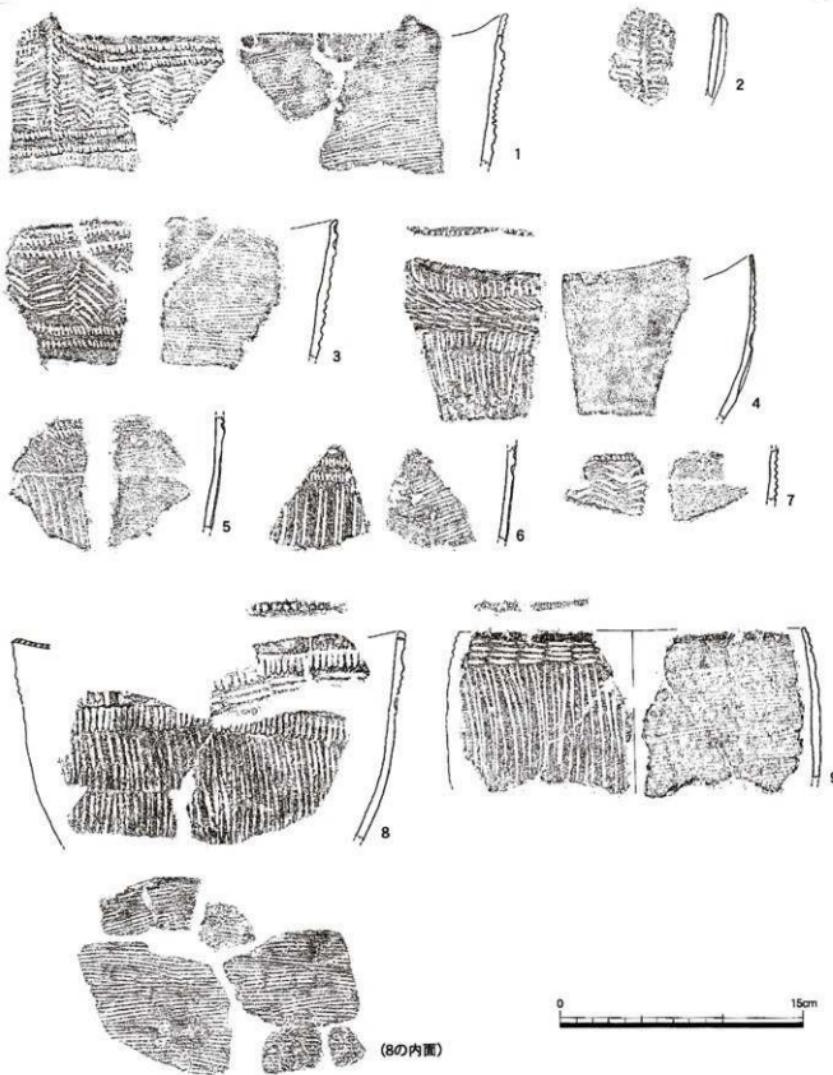


Fig. 7 縄文前期土器実測図1 (1/3)

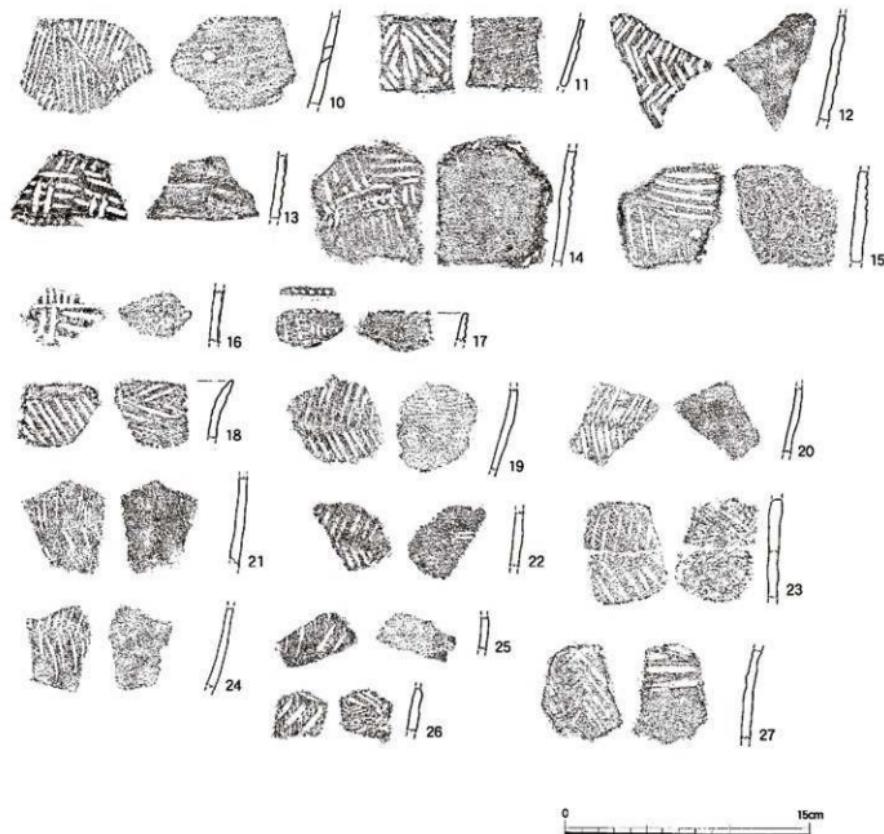


Fig. 8 縄文前期土器実測図2 (1/3)

かに弧を描いている。内面は34に条痕が比較的残る他はナデによる調整である。30の内面には弧線と直線の極めて細い沈線が刻まれている。36は滑石を含み硬質な焼成となっている。

39～42はFig. 8にみられる列状の押引文が施され、41、42ではこれより以下が無文となっている。42は1、3同様に器厚が薄く、内外面には条痕が残る。43、44は縦位の沈線が施される。43は施文具を強く当て、下に長く抜く。44の沈線は浅い。

Fig. 10の45～52は51を除き平行する複数以上の隆起線を有した轟式土器である。48は4条であるが、3条が最も多いとみられる。摩滅したものが多いが、外面には条痕はみられず、内面に残っている条痕も、ナデによって浅く不明瞭となっている。51は口縁にかけて開き、波状となる。内外面ともに条痕を残し、口縁から下がった位置に丸みのある低い隆起線が1条みられる。53は3条の隆起線と右

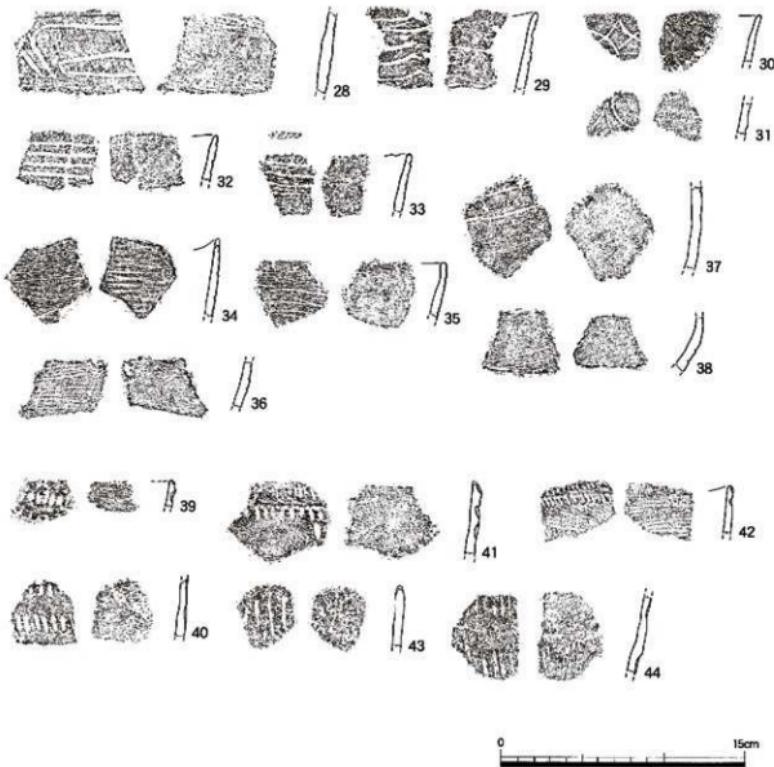


Fig. 9 綱文前期土器実測図3 (1/3)

端に縦位の隆起が付されている。内面摩滅している。54～58は細い沈線文と隆起線文が組み合う。外面には条痕はみられないが、内面には明瞭に残す。沈線は連対弧状文、重弧文とみられる弧線、放射状になったもの、複線山形文がある。58は図示した隆起線間に複線山形文を配し、隆起線の上下にも沈線が刻まれていることから3段以上の文様帯になる。沈線は細く、上の隆起線は丸い頂部を呈した断面三角形に近いが、下の隆起線は幅が9mmと広く、低平で上から押された指頭痕が残る。59にはる隆起線は無いが、連対弧状文とみられる3条以上の弧線が施されている。

Fig. 11の60～64も隆起線を施した破片である。いずれも、摩滅が著しい。条痕は63の内外面にみられる他は残っていない。61の隆起線は低平だが、63は高く断面三角形を呈す。64は比較的高い隆起線に刻みを有す。

65は器面の摩耗がほとんどなく、残りが良好である。胴部が膨らみ、口縁部にかけて内傾し、端部近くでわずかに外反する。端部は窄まり丸く收める。口縁端部から1.2cm下がった位置に1条、胴部の最大径部から少し下がった位置に2条の隆起線を施す。隆起線は上位の1条は頂部が丸く、比較的高



Fig. 10 繩文前期土器実測図4 (1/3)

いが、下位の2条は低く、上下両端にヨコナデが施されているが、歪んで崩れている。外面は縦位から斜位の条痕が施された後、丁寧なナデによって条痕はほとんど消されている。内部の横位の条痕も部分的に残るが、ナデを加えられ、不明瞭となっている。復元口径24.0cmを測る。器形、大きさ等、市内の四箇遺跡J-101地点出土(註3)に近似した轟B式に含まれる。

Fig. 12の66~69は縦位の沈線文、条痕文土器である。66は条痕が残る小型の口縁部である。口縁

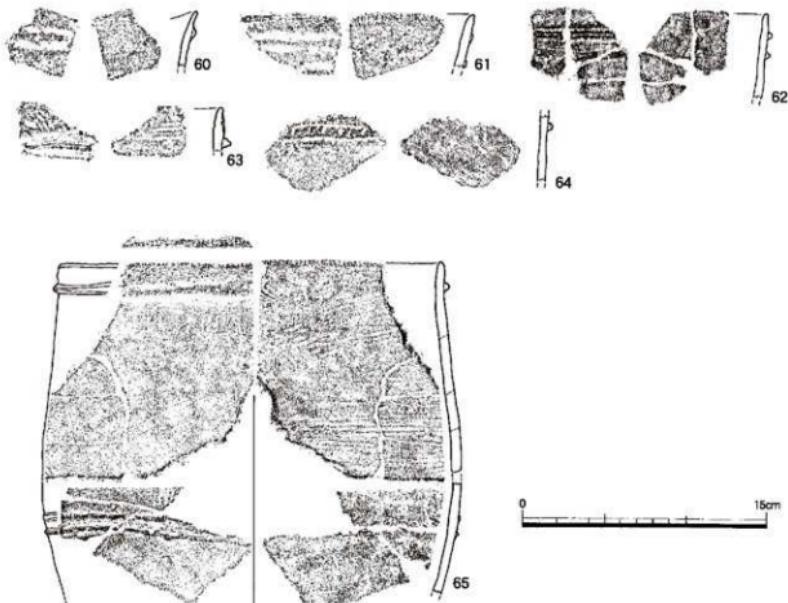


Fig. 11 繩文前期土器実測図5 (1/3)

端部は内面から押さえられ銳角に窄まる。内外面には条痕が残るが、ナデによって不明瞭となっている。67は復元口径16.8cmの小型の深鉢である。外面は縦位の条痕を残し、体部下位にはそれを切った横位から斜位の2本単位による沈線が一部みられる。内面は遺存する全体に条痕が明瞭に残る。68は復元口径22.0cmを測る。脛部がわざかに張り出し、口縁部が外反する。内外面に粗く、幅広い条痕が明瞭にみられる。外面は口縁部からわざかに屈曲した頸部まで横位から斜位の条痕を残し、頸部付近に6点以上が単位となった押し引き状の刺突列点文が一部に施されている。頸部から底部にかけては斜位から縦位の条痕となっている。内面は横位の条痕後、脣部最大径以下に斜位の条痕が加わる。69は粘土帶の織目で破損した丸みを帯びる平底である。摩滅しているが、内外面に条痕が残る。赤褐色を呈す。

Fig. 13の70~72は縦位の沈線文、75は条痕文土器である。70はナデ調整によって縦位の条痕がほとんど消された後、2本単位の沈線を縦位に長く施している。内面は横位の条痕を明瞭に残す。71は内面上端に太い横線文を有していることから、体部上位の破片と考えられる。外面に長さ約4cmの短い沈線文を3段施し、以下は長く伸びるようである。沈線は2本単位か。72は脣部最大径35.0cmを測る。外面は条痕後にナデ調整し、さらに縦位の沈線文を施す。沈線は幅広く深い。沈線は2本単位とみられる。内面は横位の条痕が明瞭に残る。73は条痕文土器である。脣部最大径41.0cmを測り、5次調査を含め、最も大きい。外面には縦位の条痕が残るが、下位はナデ消されている。内面は横位の条痕が明瞭に残る。

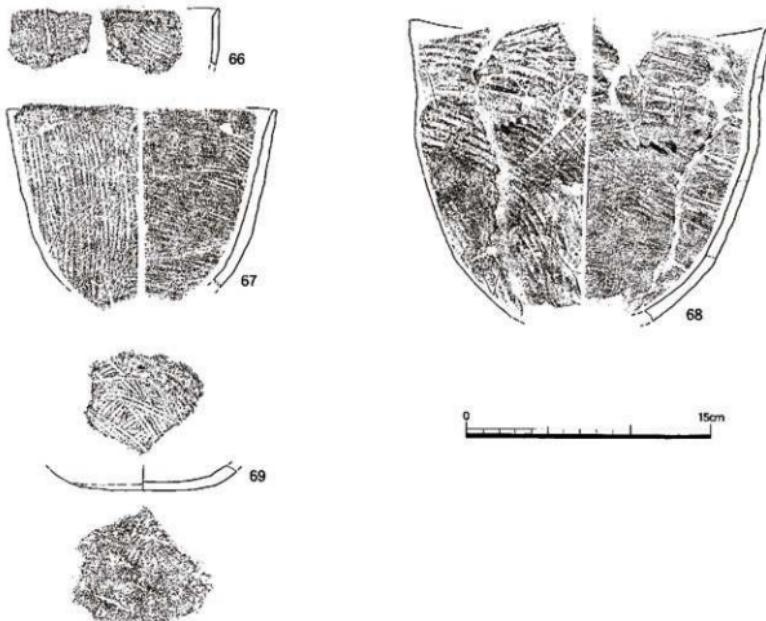


Fig. 12 縄文前期土器実測図6 (1/3)

#### SX44出土石器 (Fig. 14, 16 Ph. 15, 16)

1~10はサヌカイト製である。1、2は石匙、3、4、6、8はスクレイパー、7は石核、5、9、10は剥片である。8の側縁の連続剥離面は鋸歯状となる。9の縦長剥片は自然面を残す。11は攪乱から出土したが、同時期と思われる。黒曜石製で尖頭状の調整剥離がみられ、上下が折損している。12は安山岩製と思われる折損した磨製石斧である。13 (Fig. 15) は礫岩製と思われる台石または石皿である。方形の平石で、上、下の平坦面が磨耗し鉢鉄が付着している。側面にも滑らかな面がある。

#### その他の遺物 (Fig. 15)

各遺構の説明の中で既述したので、出土地点と種類のみ再述する。74~78はSD02出土の弥生終末土器。79はSX45出土の瓦玉。80は包含層42出土の白磁皿。81はSX04出土の灰壁。

## IV おわりに

### 1. 遺構の時期と性格

既述したように遺構は第1面の南東隅のみで検出された。大半は中世までの開析により流出したものと考えられる。遺構の時期としては出土遺物から弥生終末期から中世までの時期が含まれている。5次調査では1面からは溝、掘立柱建物、土壙等が検出されている。出土遺物は弥生中期から古墳前期のものが多いようであるが、遺構の時期は古墳後期から古代に降るもののが大半を占めている。

### 2. SX44出土土器について

第7次調査2面のSX44から出土した縄文土器は前期の轟B式と曾畠式後半期が主となっている。

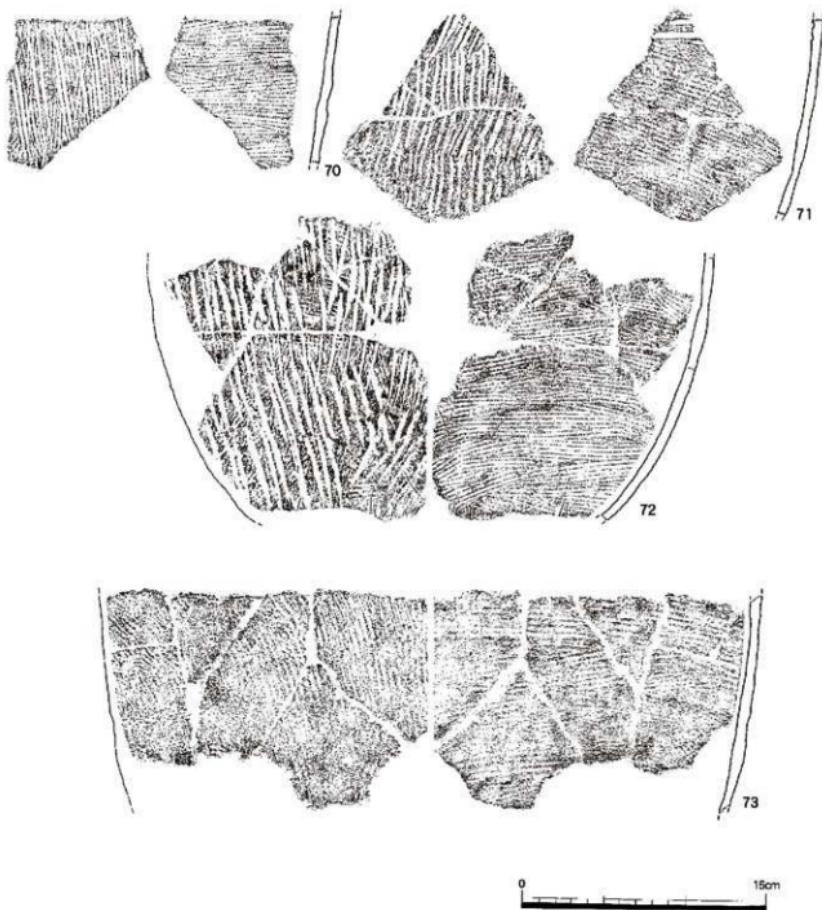


Fig. 13 繩文前期土器実測図7 (1/3)

南側の5次調査の縄文河川から出土した土器群は早期の押型文から中期の縄文を施した時期まで含むが、主体となるのは轟B式から曾畠式である。この点は今回の7次調査と同じであるが、7次調査と異なるのは総量が多く、広範囲から出土していることや曾畠式の古いタイプも多く出土していることが挙げられる。従って、流出した範囲や位置の違いに依るところが大きいと考えるが、近接した位置に縄文前期前半の轟B式と後半に降る曾畠式の時期を主にした集落が営まれたものとみられる。

7次調査で出土した曾畠系の土器の特徴として、以下のことが挙げられる。1. 滑石を含まない。2. 文様が粗略化している。3. 口縁部内面に文様が無くなる。4. 厚みが薄い。5. 内面の条痕をナデ調

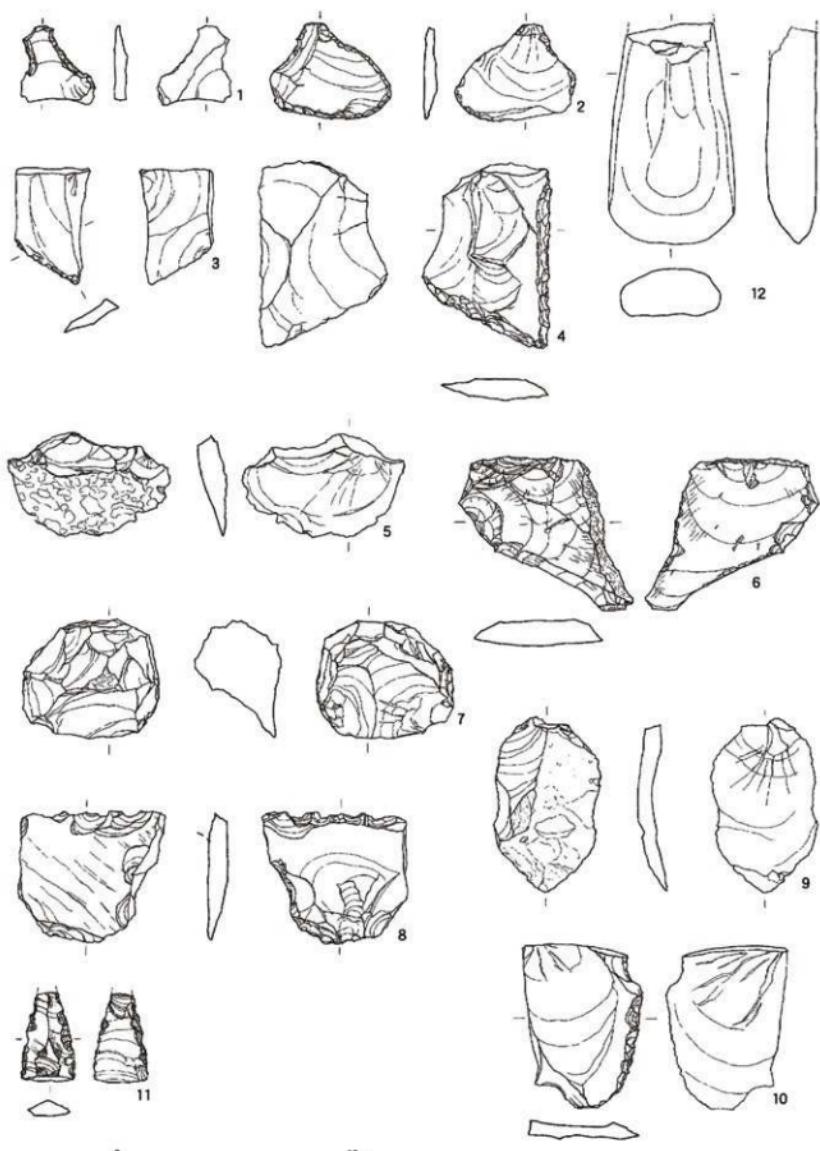


Fig. 14 繩文前期石器実測図1 (1/2)

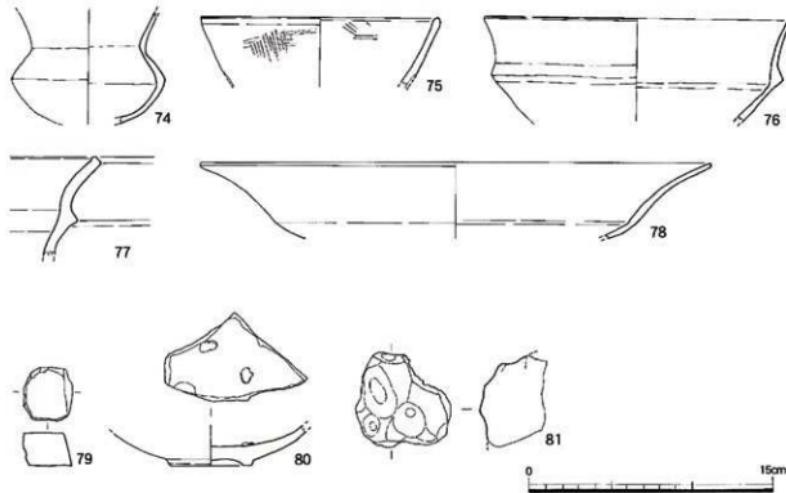


Fig. 15 その他の出土遺物 (1/3)

整によって消しているものが多い。6. 縦位の2本単位の沈線文を施したものがある。これらの特徴は曾畠終末期の曾畠Ⅲ式に通じたものと思われる。

65の轟B式土器については報文中でも触れたが、市内の四箇遺跡J-101地点出土の土器と近似するが、外面のナデ調整が際立ち後出的である。複線山形文や連弧文を有したタイプとともに轟B式の中では後出するものと思われる。（註4）

註1) 唐津市教育委員会 1982『菴畠』唐津市文化財調査報告書第5集

註2) 山崎真治 2007『曾畠式土器の終焉』

『古文化論叢』 第57集 p-23

註3) 福岡市教育委員会 1981『四箇周辺遺跡調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集 p-41

註4) 高橋信武 1989 「轟式土器再考」

『考古学雑誌』 第75巻第1号 p-27

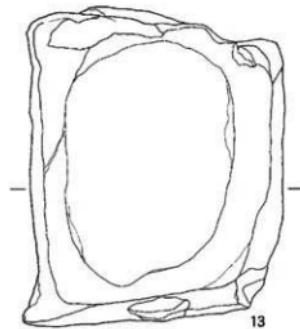
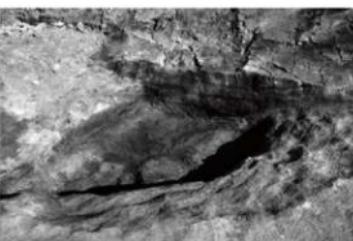


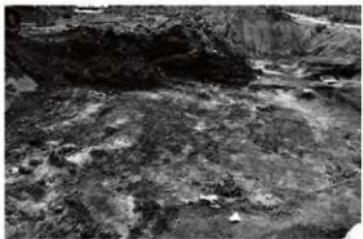
Fig. 16 SX44出土石器実測図2 (1/4)



Ph. 1 1区第1面全景（南から）



Ph. 2 1区SK01（西から）



Ph. 3 1区下層（第2面 南西から）



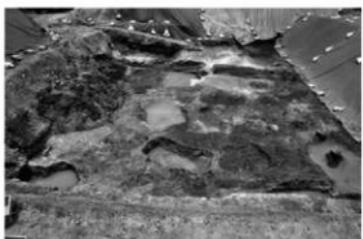
Ph. 4 2区第1面全景（西から）



Ph. 5 2区南東隅土層（A-A' 西から）



Ph. 6 2区北東隅土層（B-B' 西から）



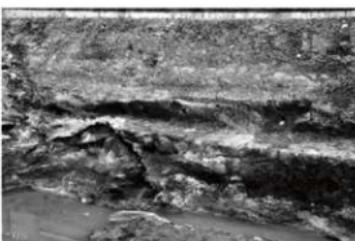
Ph. 7 3区第1面全景（南から）



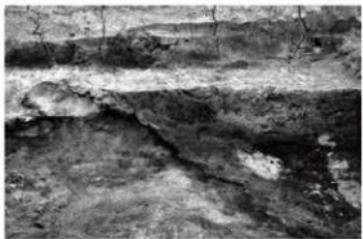
Ph. 8 4区第1面全景（南から）



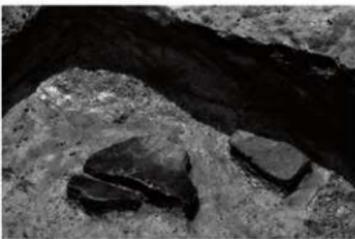
Ph. 9 SD43、SX44検出状況（北から）



Ph. 10 SD43、SX44土層（C-C' 北西から）



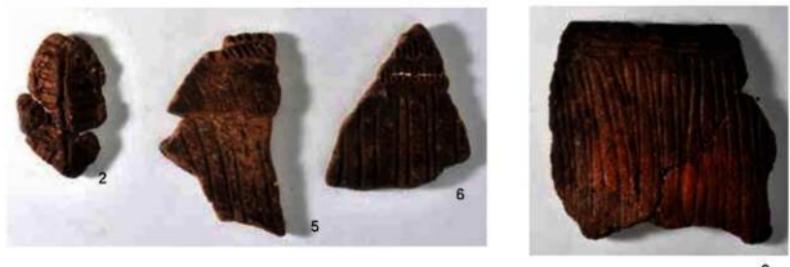
Ph. 11 SD43、SX44近接土層（北から）



Ph. 12 SX44出土状況（北西から）



Ph. 13 SX44出土縄文土器1



Ph. 14 SX44出土繩文土器2



67



68



65



12



13

Ph. 15 SX44出土繩文土器3, 石器1



Ph. 16 SX44出土縄文石器2

## 報 告 書 抄 錄

## 中村町遺跡 6

－中村町遺跡第7次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1365集

2019（平成31）年3月25日

発行 福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社 ハザマ印刷

〒815-0081 福岡市南区那の川1-20-23